



《両界曼荼羅図》のうち「金剛界曼荼羅」



《両界曼荼羅図》のうち「胎蔵界曼荼羅」

## 特別公開展「若穂清水寺の至宝」を開催しました。

2月4日～3月11日に特別公開展「若穂 清水寺の至宝」を開催しました。

長野市若穂保科の清水寺には、鋏形（兜の前立）の源流として位置づけられる《鉄鋏形》と、全国的にも現存作例の少ない鎌倉前期に遡る《両界曼荼羅図》が伝わっています。今回は約100年ぶり、県内では一般初公開の貴重な機会となりました。

また、特別公開展の期間中には、関連行事として「曼荼羅解説会」を3回にわたって行いました。密教や曼荼羅の概要については、この解説会や、展覧会に合わせて作ったパンフレットでご紹介しましたので、ここでは少し視点を変えて清水寺本に迫ってみたいと思います。

## スクープ1!

### 《両界曼荼羅図》は伽藍が全焼した保科大火から生き延びた!?

若穂保科の清水寺は、開基を行基とし、坂上田村麻呂が中興したと伝えられます。今回の特別公開展でご紹介した《鉄鍬形》と《両界曼荼羅図》は、どちらも田村麻呂の奉納として伝えられてきました<sup>1</sup>。《両界曼荼羅図》は田村麻呂が建立した三重塔<sup>2</sup>の第三層に安置されたと伝わります<sup>3</sup>が詳細は不明です。

近代に入ってから記録では、大正2年(1913)に上梓された『上高井郡誌』にそれぞれに関する記述があり、翌年に《鉄鍬形》が、大正4年に《両界曼荼羅図》がいわゆる旧国宝に指定されています。それぞれ、その後の文化財保護法の施行により重要文化財に指定されました。

清水寺は、大正5年の保科大火で烏有に帰しましたが、その際《鉄鍬形》と《両界曼荼羅図》は、東京・靖国神社の遊就館に貸し出されていたため、奇跡的に難を逃れたとされます<sup>4</sup>(《鉄鍬形》の遊就館への貸し出しについては、明治40年(1907.41年とも)から同47年まで<sup>5</sup>と、昭和12年(1937)から同19年まで<sup>6</sup>の2回が記録により確認できます。)

## スクープ2!

### 《両界曼荼羅図》はもとの大きさより小さくなっている!?

《両界曼荼羅図》は、金剛界曼荼羅と胎藏界曼荼羅の二幅一対で構成されます。両幅とも絹本著色。法量(織物の表具を除いた画面部分のサイズ)はそれぞれ、金剛界が縦104.4×横85.6cm、胎藏界が縦104.5×横85.6cm。

しかし、両幅の画面の周囲をよく見てみると、金の界線で区切られたさらに外側に、赤く彩色された帯状の部分があることが分かります(右の写真、金剛界曼荼羅の部分)。これは両界曼荼羅の装丁として通常見られる「描表装」の一部が残っていると考えられます。通例描表装は、一定の幅があり中に模様が表されますので、制作当初の描

表装は、後世の修理<sup>7</sup>の際などに大部分が切られてしまっていると考えられます。つまり、描表装を含めると、両幅とももう一回り大きかったと想像できます。

ちなみに現存最古の両界曼荼羅である《高雄曼荼羅図》(国宝、京都・神護寺、9世紀)が、金剛界縦409.0×横368.0cm、胎藏界縦448.0×横408.0cm(それぞれ描表装を含む)。高雄曼荼羅に近似した図像を持つ《両界曼荼羅図(血曼荼羅)》(重要文化財、和歌山・金剛峯寺、久安5・1149年)が、各縦424.4×横394.0cm。このように巨大な両界曼荼羅は、堂内を荘厳するという舞台装置としての役目も担っていたと考えられます。堂内の東西壁に巨大な曼荼羅を掛け、一瞬にして密教空間を現出するのです。しかし時代が下ると、両界曼荼羅の法量は縮小する傾向があります。それには、両界曼荼羅に合わせた大きな堂の整備が困難であることなど様々な理由が考えられます。清水寺本と制作年代に近い《両界曼荼羅図》(重要文化財、和歌山・竜光院、13世紀)は、各縦148.0×横127.3cm、《両界曼荼羅図》(重要文化財、大阪・四天王寺、13世紀)は、各縦180.0×横150.0cm。曼荼羅が日本にもたらされた頃からすると、大分小さくなっていることが分かります。



- 1 清水寺と行基や田村麻呂との関係については、『上高井郡誌』(『日本郡誌史料集成 中部地方』明治文献、昭和49年。上梓は大正2年。)を参照。
- 2 室町時代に再建されたものが大正5年の保科大火で焼失した。『長野県史美術建築資料編 全一巻(二)建築』長野県史刊行会、平成2年。
- 3 注1『上高井郡誌』。『上高井郡誌』の執筆段階では、両界曼荼羅は三重塔にはなかったようであるが、古作の両界曼荼羅図についての記述がある。
- 4 長野市若穂文化財調査委員会編『長野市若穂の文化財』長野市若穂公民館、昭和58年。
- 5 注1『上高井郡誌』
- 6 昭和10年以降の遊就館の記録台帳より。大正年間の記録には清水寺蔵の《鉄鍬形》と《両界曼荼羅図》の展示記録が見当たらないが、全ての記録が残されているわけではないとのこと。※遊就館調べによる。
- 7 近年の修理については、蓋裏に「依國寶保存法於大阪市立美術館昭和十四年十一月修理施行畢」と墨書される。

## スクープ3!

### 《両界曼荼羅図》には青色や緑色も使われていた!?

現状の《両界曼荼羅図》は一見して、茶色い下に赤系の色と、黒っぽい色が目立ちます。しかしもともとは、青色や緑色も使われていました。

まずは、諸尊の頭部を見てみましょう。たとえば胎蔵界曼荼羅の中央に描かれる八葉蓮華に坐す「宝幢如来」の頭部（下の写真）。螺髪の部分に塗られていた彩色がごっそりとなくなって白っぽくなっていることがお分かりになるでしょうか？ かすかに感じられる色合いから、ここには本来群青と呼ばれる濃い青色が塗られていたと考えられます。他の諸尊の頭部にも同様の現象が見られます。



次に、緑色を見てみましょう。たとえば金剛界曼荼羅の左上の部分（四印会）の中央に坐す「大日如来」の蓮華座（下の写真）。ここに少し白っぽい緑色を確認することができます。大日如来が坐る蓮華座は通常宝蓮華座といい、各蓮弁が青・赤・緑の縹縹彩色で華やかに装飾されています。縹縹彩色は立体感を出すための彩色技法で、同系統の色を、段階的に濃度を変えて塗っていきます



（暈しではない）。両界曼荼羅では通常、蓮弁の中央より濃い色で、花びらの先端に行くに従って薄くなるので、清水寺本で見ることができる緑は、縹縹の薄い白っぽい部分だと考えられます。中央よりの緑色の濃い部分は剥がれ落ちています。

さて、緑の蓮弁の隣は、通常だと青の縹縹が施される蓮弁です。ここには黒っぽい色がベタ塗りされています。この色は一体何でしょう。同じ色が他の諸尊の蓮華座にも見られます。たとえば、胎蔵界曼荼羅の右下の方に描かれる「不思議慧菩薩」（下の写真。左）。黒っぽい色から順に茶色っぽい色、そして白へと縹縹彩色の表現がなされています。ここを赤外線撮影してみると、黒っぽい色だけがはっきりと写っています（下の写真。右）。赤外線撮影では墨線がはっきりと写るので、この黒っぽい色は墨だということが分かります。彩色ではなく墨が縹縹の中央に塗られることは他に類例がなく、おそらく濃い赤系の色が剥落し、後世の修理で墨が塗られたのだと思われます。ひるがえって、先ほどの金剛界曼荼羅の「大日如来」の宝蓮華座を見ると、おそらく濃い青（群青）が剥落したあとに、後世墨で補彩したのだと思われます。

このように、もともと濃い彩色であったと思われる部分に、墨による補彩が所々見られ、《両界曼荼羅図》の全体に暗い印象を与える一因になっています。しかし、濃淡を様々に使い分けながら、青や赤や緑などの彩色が華やかに施されていた当初の姿を思い浮かべてみてください。華やかな両界曼荼羅の世界が想像できることでしょう。

（竹下多美）



# 長野市内の伝統行事

長野市内には現在もさまざまな伝統行事が残されています。しかし担い手の不足や高齢化などの理由により、存続の危機に瀕しているものも少なくはありません。例えば大岡地区の長岩佃見集落で行われていた塩釜神社の甘酒祭りは、春の祭礼に集落で造った甘酒を桶に入れて巨石の上に祀られた神社まで担ぎ上げてお供えし、参拝者に振る舞うという行事で、長野市では無形民俗文化財として文化財指定をしていた行事でした。ところが、平成20年3月に高齢化により行事の存続が困難として、集落から指定解除の申請が出され、7月に文化財指定が解除されています。

これまで長野市の無形民俗文化財に指定されたもののなかで指定解除となったのはこれが初めてでした。しかし、今後は同様の事例がいつ生じてもおかしくはない状況だといえます。

博物館では現在の伝統行事を取り巻く状況を踏まえ、今年度から市内の伝統行事の記録撮影事業を始めました。これは将来万が一行事が絶えてしまったとしても映像記録として後世に伝えることができるためであり、また行事を記録することで改めて、その由来や役割、地域の人々の行事に対する思いについて考えるきっかけとするために行ったものです。

ここでは今年度記録撮影を行った3つの伝統行事について紹介し、それぞれの行事の意味や性格について考えてみたいと思います。

## 大岡地区周辺の人形送り行事

春のお彼岸の中日に、大岡地区とそれに隣接する信更地区の複数の集落では、藁人形を作り、集落境に立ててこれから一年間の集落の守り神とするセードーボーあるいはデーダーボーと呼ばれる人形送りの行事が行われています。

現在この行事を行っている集落は、大岡地区の日方、上中山、外花見、慶師、棚原、下栗尾、長岩・佃見（ここでは2集落合同で行う）と信更地区軽井沢の8ヶ所です。行事の内容は、藁で人形を作り、集落境に持っていくことはどの集落にも共通していますが、人形作りの前後にお数珠回しを行うところや、人形の数を集落の戸数分作るころから、大きな男女一対の人形を作るところ、馬に乗った侍人形を作るところ、あるいは人形を境に立てずに投げ捨てるころなど、細かな点は集落によって異なります。（その詳細については博物館だより65号に載せていますのでご覧ください）

このような違いが生まれる理由についてはっきりとしたことはわかりませんが、集落ごとの行事内容を比べてみると、おそらく行事が行われ始めた頃は人形に災厄を託して集落外に追放していたものが、のちに災厄を託した人形を集落の守り神として境に立てるようになり、やがて同じように境に立って集落を守る道祖神と習合して、男女一対の人形を立てる集落なども現れるようになった



▲日方の人形送り



▲上中山のセイゾーボー人形  
男女一対に作られ、集落入口にある庚申塔に立てかけられる。

ものと推測できます。

大岡地区周辺の人形送り行事は、各集落の行事内容を見ることで、行事の変遷過程を追うことができるという特徴をもった行事です。



▲打ち捨てられたセイドボー人形  
軽井沢集落では藁人形を集落境に投げ捨て、後ろを振り向かずに戻る。後ろを振り向くと人形に託した災厄が自分の身に振りかかるとされるため。

## 県内の人形送り行事

市内において人形送りをするところは、大岡地区周辺でしか見られませんが、県内に目を向けると、同様の行事を行なっている地域を見つけることができます。

### 犀川流域の人形送り行事

大岡地区と同じ犀川流域にある旧本城村（現在は筑北村本城）でも春のお彼岸の中日に藁人形を送る行事が行われています。旧本城村立川の集落で行われる百万遍と呼ばれるこの行事は、名前の通りみんなが集まりお念仏を唱えながらお数珠を回す百万遍念仏に重点が置かれていますが、同時に男女一对の藁人形を作り、竹で作った乗り物に向かい合わせにして置き、集落境まで送って人形を外へ追放します。



▲立川の百万遍



▲人形は集落境で川に投げ捨てられる

### 松本市域の人形送り行事

通称コトヨウカとよばれる2月8日の日を中心にして松本市域の複数の集落で行われる厄病除けの行事の中にも、人形送りの場面がみられます。松本市入山辺の集落では、藁で馬とそれに乗るジジ、ババ2体の人形を作り、数珠回しを行ったあと、薄川へ持って行き、その場でもお数珠回しをした後、人形を焼き捨てます。ここではこの行事をピンボーガミと呼んでおり、人形を災厄が集積したものとみなしていることがわかります。

### 天竜川流域の人形送り行事

天竜川東岸の竜東地域でも2月8日を中心にコトヨウカの行事が行われています。ここでは男女一对の藁人形を藁で作った御輿に納め、これを複数の集落がリレー形式で順番に送っていき、最後の集落で集落境に人形を追放するという、人形の送り方に特徴がみられる行事内容となっています。

大岡地区周辺にみられる人形送り行事がどのような経緯でこの地に伝えられたのか、またその行事内容がどのような過程で現在の姿になったのかについては、記録などもないため残念ながらわかりません。しかし、これまで見てきたほかの地域の同様な行事と比較することでわかることも出てくるかもしれません。今のところそれぞれの行事に関連があるのかわからないのはわかりません。ただし、同じ犀川流域内である旧本城村の行事とは日程・内容ともに同一であり、何らかの関係があったものと考えられます。今後はこれら市外の人形送り行事の詳細な調査を行うことでわかることも出てくるでしょう。

## 竹房の百八灯行事

信州新町のろうかく湖の右岸に位置する竹房集落で毎年8月15日に行われる百八灯行事は、集落境の道端に108個の藁束を立てて火を灯した後、行事の参加者が各自で用意した紐がついた藁束に火をつけ、これを振り回しながら坂道を下っていく勇壮な行事です。

行事が行われる場所が集落境であり、道祖神も祀られていることや、昔この地に疫病が流行ったため、行事が始められたとの話や、かつてこの行事を中止したら赤痢が流行ったので今は中止することなく続けているなどの話から、百八灯が疫病除けの行事として行われていることがわかります。また、8月15日という期日から、お盆の送り火行事としても考えられています。

かつては竹房だけでなく同じ信州新町の複数の集落で、お盆の頃に日をすこしずつ違えながら行われていましたが、次第にすたれ、現在この行事を行なっているのは市内でここだけとなっています。



▲百八のたいまつに火がつけられる



▲たいまつを振り回しながら坂道を降りていく

### 各地のたいまつを振り回す行事

ところで、竹房では百八のたいまつに火をつけた後、それぞれが持ち寄ったたいまつに火をつけ

て振り回しながら行進しますが、このような例は各地の百八灯行事の中には見られません。ではなぜ竹房ではたいまつを振り回すのでしょうか。そこで、次に百八灯以外の行事に目を向け、竹房以外のたいまつを振り回す行事について見ていきたいと思います。

### 松本市洞の盆行事

ここでは迎え盆の13日に子どもたちが「ダンボ ダンボ 振りダンボ」と歌いながら集落の貯水池の土手で、縄をつけた藁束に火をつけて振り回す、ダンボという行事が行われます。かつては迎え盆だけでなく送り盆にも行われ、また場所も近くの山の上で行われていたそうです。名称のダンボは念仏の「ナンマイダンボ（南無阿弥陀仏）」の声の後半部分のダンボから来ているものと思われます。

名称や行事の行われる日にちなどから先祖供養の行事であることがわかります。

### 上伊那地方の盆行事

上伊那地方では「まんど」あるいは「振りまんど」といって、お盆の時期に松本や竹房と同様にたいまつを振り回す行事が各地で見られます。

南箕輪村田畑では、13日の晩に子どもたちが火のついた麦がらを振り回しながら「まんどやまんど お迎えまんど」とうたいながら坂を下ります。かつては13日だけでなく16日まで連夜行われ、13日が「迎えまんど」、14・15日が「ご馳走まんど」、16日が「送りまんど」と呼ばれていました。「まんど」とは仏に献納する万灯と呼ばれる灯明のことでしょう。この「まんど」は伊那市や辰野町でも行われます。

県内の事例から、竹房の百八灯は通常の百八つのたいまつに火をつける行事に、振りまんど行事が合わさったもので、この二つの行事内容をまとめて百八灯と呼んでいることがわかります。さらに、竹房の場合は厄病除けとしての意識が強いことから、たいまつを振り回すことで、火の力を最大限に発揮させて集落外から来る厄病を祓うという意味合いも持たせていることが推察されます。

(細井雄次郎)

## 長野市篠ノ井の伝統行事：虫送り

虫送りとは、農作物の害虫を村の外へ追い出すことによって、その年の豊作を願うという伝統行事です。この行事は全国的に6月から8月に行われることが多く、長野市では7月31日に篠ノ井犬石地区で、8月4日に篠ノ井東横田地区で行われています。

犬石と東横田では同じ市内であっても、山間部と河川部という地域の違いから行事に使用する材料の違いが見られます。両地域ともそれぞれの地域でとれる材料を用いて行事で使用する道具を作ります。

東横田の場合はこの地域でとれる麦わらでたいまつを作り、千曲川河川敷で刈ったヨシで虫かごを作って虫の中に入れ、岩野橋から千曲川に流して村の外に虫を追い出します。途中、堤防ができたことによって、岩野橋へ行くルートが変わりましたが、それ以外では特に大きな変化はなく、昔からの伝統を守って一日中行事が行われています。



▲東横田の虫送りの様子

一方、犬石の場合は麦わらを使ってお御輿を作ります。以前は虫を入れ、たいまつも作っていました。しかし現在では虫を入れず、たいまつも作らず発煙筒を使っています。また、行事を行う時間も一日かけて行われるのではなく、夕方から夜にかけて行われるようになり、行事が行いやすい形へと変化しています。

その他、村境の場所も変わっています。犬石の場合、村境でお御輿を燃やすことによって、虫を村の外に追い出します。しかし、その場所も火事の危険性や工事などの理由によって、安全な場所に変更しています。

昔ながらの伝統行事にたいまつではなく発煙筒という器具が使われていることに、伝統行事らしさを感じられないかもしれませんが、その行事の意義や行う人の心は東横田と同じく昔から受け継

がれています。



▲上の写真は1990年に行われた犬石の虫送りの様子です。

下の2011年に行われた写真と違い、竹で作ったたいまつを使っていることが確認できます。



このように、伝統行事といっても昔のままの姿を残している行事だけではありません。時代の変化に合わせた行事もあるのです。

つまり、伝統行事とは必ずしも昔ながらの形式のまま行われるものではなく、昔から伝えられていることを次の世代に伝えるために行うものではないでしょうか。  
(山本隆晃)

今回紹介した3つの伝統行事の様子については博物館内で映像をご覧になることができます。しかし、それで終わりとするのではなく、博物館で行事の内容をご覧いただいた後にぜひ現地に足を運んでいただき、生の行事をご覧ください。きっと貴重な体験ができると思います。

# 松代の地下をみる！松代深層ボーリングコアの紹介

昭和40年8月3日から5年半も続いた松代群発地震。この地震を経験された方は多いことでしょう。この長く続いた地震は、国内外で注目され広く報道されました。震源は、皆神山の近くで地下数キロメートルと浅いものでした。そこで、震源まで地面を掘り下げて、地下にどのような岩石があるのかを調べることになりました。これが松代深層ボーリング調査です。

1969年から1970年にかけて、独立行政法人防災科学技術研究所が、松代荘で大がかりな松代深層ボーリング調査を行いました。このボーリング調査では、全長1,933メートルまで掘り下げることができ、松代の地下や震源の貴重な情報を多く得ることができました。現在、このボーリングの資料は、長野市立博物館で保管されています。



▲松代深層ボーリングコアを掘削するために組まれた樽。この中ではドリルを使って地下を掘り進めて岩石を取り出しています。

このボーリングコアを詳しくみると、様々な岩石がみられることに気がつきます。黒っぽい色をした岩石は、かつて長野に広がっていた海に堆積した黑色頁岩です。また、白っぽい色をした堆積

岩は、松代の地下深くに熱水があり、その影響で白く変質したものと思われます。その他には、マグマが貫入してゆっくりと冷えてできた石英閃緑岩や、黒い色をした緻密な玄武岩、また火山噴火によって遠くから飛んできた火山灰が固まった緑色をした凝灰岩もあります。これらのボーリングコアを並べてみると、いろいろな色をした岩石があることに驚きます。まさに自然のつくりだした芸術。



▲長野市立博物館で保管している松代深層ボーリングコア資料。博物館の中庭に並べて設置しています。色の違いを実際に観察することができます。

このようなボーリングコアの調査は、各地方自治体で行われていますが、そのデータは広く公表されることもなく、紙媒体として眠ったままになっていることが多いという現状があります。そのため、これらの資料を整理し、この貴重な情報のデータベース化を行っています。そうすることで、貴重な地盤情報を長野市立博物館から発信し、広く活用されることを目指していきたいと思えます。

(伊藤拓馬)

## 【博物館のホームページアドレス】

<http://www.city.nagano.nagano.jp/museum/index.html>

- |                          |                               |               |
|--------------------------|-------------------------------|---------------|
| ◆長野市立博物館                 | 〒381-2212 長野市小島田1414          | ☎026(284)9011 |
| ◆戸隠地質化石博物館               | 〒381-4101 長野市戸隠栃原3400         | ☎026(252)2228 |
| ◆鬼無里ふるさと資料館              | 〒381-4301 長野市鬼無里和田沖・国道406号線沿い | ☎026(256)3270 |
| ◆信州新美濃館 有能生員記念館 信州新化石博物館 | 〒381-2404 長野市信州新町新上条88-3      | ☎026(262)3500 |
| ◆ミュゼ蔵                    | 〒381-2405 長野市信州新町新町37-1       | ☎026(262)2500 |